

— 本学図書館のスペシャル・コレクションより(2) —

ニッポナリアと対外交渉史料の魅力

福澤諭吉 バールの向こうの橋耕斎に感謝す

奥 正敬

江戸時代末期の安政元（1854）年、アメリカのペリー提督に遅れをとりながらも、日露修好条約の締結を求めて来日していたプーチン艦隊の中国語通訳官O. A. ゴシケヴィッチの手引きで、鎖国体制下の我が国から密出国をして、当時のロシアの首都ペテルスブルグへ入った人物がいた。

この人、名を立花糸蔵といい遠州（現在の静岡県）掛川藩を脱藩して身を持ち崩していたが、元は緒方洪庵の門下で蘭学を修めた知識人であった。

日本出国後、イギリス船に襲われ同国での抑留生活を経てペテルスブルグに到着すると、ゴシケヴィッチはロシア国内の日本語研究の遅れを痛感する中で、立花の才能を活かした辞書編纂に着手して、1857（安政4）年に約1万5800語を収録した世界初の日露事典『和魯通言比考』をロシア外務省アジア局から出版した。



『和魯通言比考』（本学図書館所蔵）

立花は自らを同書の標題紙上で「橋耕斎」と名乗り、日常生活ではヤマトフ（大和夫）と称して外務省の通訳官やペテルスブルグ大学の東洋学部の教員を勤めた。

その後の1861（文久元）年、徳川幕府は開港開市延期交渉のため外国奉行竹内下野守保徳を正使とし、松平石見守康直を副使にした使節団をヨーロッパに派遣し、一行はペテルスブルグにも滞在した。この時、使節団の通詞（通訳）として同行した若き福澤諭吉は、橋が係わったと思われるロシア政府の接待の模様を「露政府の厚遇」として

『福翁自伝』（下の文中写真・本学図書館所蔵）に次のように書き留めている。



竹内下野守（左）と松平石見守（本学図書館所蔵）

「（前文を省略）接待委員の人々と懇意になって種々様々な話もしたが、その節露西亞に日本人が一人居ると云う噂を聞いたその噂は、どうも間違いない事実であろうと思われる。名はヤマトフと唱えて、日本人に違いないと云う。勿論その噂は接待委員から聞いたのではない。その外の人から洩れたのであるが、先ず公然の秘密と云う位な事で、チャント分て居た。そのヤマトフに遇て見たいと思うけれどもなかなか遇われない。到頭逗留中出て来ない。出て来ないがその接待中の模様に至ては動もすると日本風の事がある。例えば室内に刀掛があり、寢床には日本流の木の枕があり、湯殿には槽を入れた糟袋があり、食物も勉めて日本調理の風にして箸茶碗なども日本の物に似て居る。どうしても露西亞人の思付く物でない。シテ見るに噂の通り何処にか日本人の居るのは間違いない、明に分て居るけれども、到頭分らずに帰て仕舞いました。私の西航日記にこの事を記して、その傍に詩の

起来就食々終眠、飽食安眠過一年、
他日若遇相識問、歐天不異故郷天

（起き来たりて食に就き食終わって眠る、飽食安眠して一年を過ごす、他日も相識の間に遇わば、欧天は故郷の天に異ならずと）

今日になって一々記憶もないが、余程日本流の事が多かったと思われる。」と。

自分自身の我侭から、祖国の法を破って出国した橋。他に邦人がいない寂しい異国の地ペテルスブルグで辞書を編纂するなど活躍はしていたものの、